
伝説回帰～5000年の時を越えて～

旅の語り部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説回帰〜5000年の時を越えて〜

【Nコード】

N6941F

【作者名】

旅の語り部

【あらすじ】

物語は、5000年前にすでに始まっていた。英雄の子孫であるテールがある出来事が、元で5000年前の真実が明かされる

【プロローグ―旅の語り部】

ここは、冒険者が集まる冒険者ギルド「ヘルメス」

昔は、世界で一番の冒険者ギルドだった。

今は、昔ほどではないが、これから冒険に出ようとしている若者達で溢れていた。

その中に、ただ一人冒険者らしくない人物が椅子に座っていた。

その男がいつからそこにいるのか？また、いつからいるのか。

周りの冒険者達は、誰もわからなかった。

だがその男の周りには、ただならない人を近づかせないオーラが、ただよっていた。

冒険者は、この男のオーラのことを、拒絶のオーラと呼んだ。

その拒絶のオーラは、迂闊に近寄ると刃物で切り裂かれるほどのすさまじいものだった。

そんな中、

その男に、興味を持った一人の人間がいた。

興味をもった人間は、まだ小さい子供だった。

小さな子供は、拒絶のオーラを気にもせず、拒絶のオーラの境界線の中に入り、その男に近づいた。

周りの冒険者は、そのことに驚いていた。

子供は、その男に、

「何をしているの？」

と聞いたが、その男は、子供の問いかけに答えようとしなかった。

そんなことが一週間の間つづいた。

冒険者らしくない男に変化が現れた。

話しかけてきた子供と話している。

冒険者達は、本当に驚いた。

子供にその男の事を聞くと、旅をしている語り部だということだった。

その男が、その子供にひとつの物語を語り始めた。

冒険者ギルドにいる冒険者達が、その男の語る物語に聞き入った。

【プロローグ〱旅の語り部】（後書き）

冒険者ギルドにいた、旅の語り部が物語を語りだす。

【オープニング〜ひとすじの光〜英雄の出現】（前書き）

冒険者ギルドに何時からいたかわからない旅の語り部が、少年との出会いにより、ある物語を語りだす。

【オープニング〜ひとすじの光〜英雄の出現】

目の前は、突然暗闇に支配されていった。

この世界は、昔、沈黙と暗闇に支配された時代があった。

世界の大半は、暗黒のオーラを持つ魔王ゼルスによって、支配されようとしていた。

人間は、魔王ゼルスに成すすべがないかのように思われた。

そんな中、一人の王が、魔王討伐の声をあげた。

しかし、魔王の力に恐れをなして誰も、魔王討伐に同調しなかったのである。

そんな中、暗闇にひとすじの光がさした。 その光とは……

魔王ゼルスを倒すため、1人の青年と4人の仲間達が魔王討伐に立ち上がった。

青年の名前は、パルという名前であった。

パルと4人の仲間達は、魔王の配下達との戦いを経て、絆を深めていった。

そして今、パル達は、魔王の居城へようやくたどり着いた。

「オーブニング」魔王城」

門の扉は、暗黒のオーラによって堅く閉ざされていた。
パル達は、手で押してみた。

だが、開くことはなかった。

【伝説回帰〜5000年の時を越えて〜伝説の道標を見た場合】
足元を見ると紙切れが落ちていた。

扉をよく見ると、門の扉に4桁の数字を入れる所がある。

パル達は、4桁の数字をいれてみた。
すると、門は動いた。

パル達は、城の中へと進んだ。

居城内部は、驚くほど数多くのいろいろな仕掛けや罠が仕掛けられていた。

しかし、パル達一行は、築き上げた絆の力によって、

仕掛けや罠を潜り抜けて、魔王ゼルスを探し続けた。

奥へと進んでいると、魔王がいるであろう玉座の間に辿り着いた。

だが、玉座の間に魔王ゼルスはいなかった。

パル達は、玉座の間をくまなく探した。

数分後・・・・・・・・

玉座の後ろを触れると、ボタンのようなものを見つけた。

ボタンを押すと、

秘密の部屋に続く道を見つけた。

道は、まっすぐな一本道だった。

パル達は、その道を進み始めた。

進むに連れて暗黒のオーラの影響なのか、冷気が漂ってきた。

もう少し進むと、物体の影が現れた。

その影は、近づくにつれ、影は濃くなっていく。

その影に向かっていくと、広すぎる部屋に到着した。

そして、魔王ゼルスを見つけた。

【オーブニング〜魔王との激闘〜始まりの終わり】

奥の秘密部屋に魔王ゼルスがいた。

その部屋は、魔王ゼルスが放つ暗黒のオーラと、
パル達が放つ信頼のオーラがあたりを支配していた。

魔王ゼルスと戦闘が始まる。

・・・数時間後・・・

・・・魔王ゼルスと戦闘は壮絶を極めた。・・・

魔王ゼルスとの激しい戦闘の末、パル達はゼルスを倒し、
最後に封印をするだけになっていた。

封印される前、魔王ゼルスは、

「いつか・・・」

必ず・・・」

という意味深な言葉を残した。

魔王ゼルスは、パル達に封印された。

魔王ゼルス封印の報、それは、暗かった人々の心を明るくした。
人々は歓喜の声をあげ、パル達は、英雄として扱われた。

この出来事は、英雄伝説として語り継がれる事になる。

・・・・・・数十年後・・・・・・

パル達【英雄】は亡くなり、
子供達はその血を受け継いでいった。

この物語は、

英雄の活躍した時代から5000年たった未来が舞台になる。

そして新たなる伝説が動き始める

【序章／5000年の時を越えて／どこから聞こえる声】

あの英雄が活躍した時代から、5000年の月日が流れた。

5000年前の暗黒な時代とは違い、空は青く、人間は活気にあふれていた。

魔王ゼルスにしていた魔族は、5000年の間に姿を見なくなつた。

5000年間、人間の時代が続いた。

5000年の間に

パル達の英雄伝説は風化していき、
平和な世の中がおとづれていた。

今、英雄伝説は、
一部の人にしか
覚えられていない。

英雄パルの子孫であることを知らない
テールが、
様々な運命に左右されながら、
新たな冒険が始まる。

しかし、テールは、英雄パルの子孫で
あることを本人もまだ知らない・・・
・・・

~~~~どこから聞こえる声~~~~

(・・・テール・・・)  
(・・・テール・・・)

どこからともなく声が聞こえてきた。

テールは寝ていた。

部屋には誰かいる気配もなかった。

しかし、どこからか声が聞こえてくる・・・

テールは、突然聞こえてきた声に驚きながらも眠りから目覚めた。

すると、今まで聞こえていた声は聞こえなくなった。

テール「何だ、気のせいか・・・」

そして、テールは、また眠りに入った。

眠りにつくとすぐに、どこからか声が聞こえてきた。

(・・・テール・・・)

(・・・テール・・・)

眠りに入っていたテールは、

自分の名前を呼ぶその声に、心の中で  
うるさいとつぶやいていた。

その後、声は次第に聞こえなくなり、

テールは深い眠りについた。

【序章　普段と変わらぬ朝　食へと続く道】

テールは、ゆっくりと眠りからさめた。

外はすっかり陽が上がりかけて、太陽の光が輝いていた。

テールは、夜中に聞こえた声がどうしても頭の中離れなかった。

あの声の主はだれだったのか・・・テールが考え込んでいるうちに、下のほうから早くおりてきなさい！！と女性の声が聞こえた。

テールは、慌てて下の階に降りていった。

テールは、階段を降りて1階に降りて来た。

ラッキー外伝【食へと続く道（ラッキー目線）】を見た後  
階段を降りたところにラッキーがいた。  
ラッキーはその場に立ち止まっていた。

テールは迷わず、いいにおいのする左側の部屋に入った。  
その軌跡は食へと続く道だった。

テールは、目の前にあった食事に駆け寄った。

マーベル外伝【食へと続く道（母親目線）】を見た後  
ふと周りを見るとペットのラッキーが食事を欲しそうな目で  
母親の周りをまわっていた。

テールは10分もしない時間で、食事を食べ終わった。

ラッキー外伝【食へと続く道（ラッキー目線）】を見た後  
ラッキーは、自分の食事がまだ出てきていないのを催促しているようだった。

食事が終わると、テールは日課になっている場所へ行こうとした。

その時、母親が大きなおにぎりを渡してきた。  
そのおにぎりは、本当に大きかった。

テールは、大きなおにぎりをもって日課になっている場所に向かうため家のドアをあけた。

テールはアイテム【大きなおにぎり】を手に入れた。

一番最初の場合

マーベル外伝（食へと続く道（母親目線））が見れるようになりました。

## 序章【同じくらいの年齢の男との会話】

テールは、玄関のドアをパタンと閉め、東の方へと歩き始めた。歩きながら、街の風景を見ていると、活気にあふれていた。

知っている人に挨拶をしながらも、日課になっている場所へと向かっている。

歩き始めて5分した時、後ろから人の気配がしたので振り返ると、

同じくらいの年齢の男が話しかけてきた。

同じ位の年齢の男「またあの場所にいくの？」

同じ位の年齢の男は、あの場所を知っていた。

確か、あいつはあの場所を知らなかったはずだ。なぜ？

疑問に思いながら、同じ位の年齢の男に語りかけた。

テール「ああいくよ。ジェームズ」

そう、この男の名前はジェームズといって、いつも俺と遊んでいる男だ。

ジェームズと呼ばれた男「俺も連れていってくれよ」

ジェームズは、連れて行ってくれ言ってきた。

テール「どうしようかな？」

ラッキー外伝【食へと続く道（ラッキー目線）】を見た後よく見るとラッキーが後ろにいるのが見えた。

## 選択肢

A ジェームズを連れて行く

ジェームズとの友情 +1

同行人に【ジェームズ】が入ります

テールは、ジェームズと一緒にに行くことにした。

テールは、ジェームズと一緒にしゃべりながら、日課になっている場所へ向かった。

B ジェームズを連れて行かない

ジェームズとの友情 -1

テールは、ジェームズを連れて行かないことにした。  
テールは、日課になっている場所へ一人で向かった。  
後ろから、憎しみのオーラが漂っていた。

ラッキー外伝【食へと続く道（ラッキー目線）】を見た場合選択肢追加

C ジェームズとラッキーを連れて行く

ジェームズとの友情 +1

ラッキーのペット度 + 1

同行人に「ジェームズとラッキー」がはいります。

テールは、ジェームズ&ラッキーと一緒に行くことにした。

テールは、ジェームズと一緒にしゃべりながら、ラッキーを連れて日課になっている場所へ向かった。

## 序章 A【小さな泉での出来事】

テールは、ジェームズを連れて行くことにした。

テール達は、日課になっている場所へと再び歩き出した。

しばらくすると山道にたどり着いた。

テールは、険しい山道を、ジェームズと一緒に会話しながら  
ゆっくりと歩いていく。

しばらくすると、小さな泉が見えた。

ジェームズ外伝【日課になっている場所へ「小さな人間？」を見た後  
ジェームズは、泉の方を見ていた。

テール達はその小さな泉で休憩することにした。

テール達は、小さな泉のそばで休憩をしていた。

その時、テールは、母親からもらった大きなおにぎりを  
食べはじめようとした。

しかし、テールは、うっかり大きなおにぎりを落としてしまった。  
大きなおにぎりは、泉の方に転がり泉へと落ちていった。

テールは、大きなおにぎりを食べ損ねたため、  
不機嫌になっていた。

そんな時、ジェームズが叫んだ。

ジェームズ「泉が光り始めたよ!!」

そんなジェームズの言葉に、テールは驚き泉の方を見た。確かに泉が光っている。テールは、その光景に驚いたが、さらに驚くことが起こった。

それは泉の中から小さな人間が現れた。

マール外伝【泉の妖精（マール目線）】を見た後

テール達は驚きを隠せなかった。

## 選択肢 A【小さな人間】

泉の中から出てきた小さな人間は、フェアリーという種族だった。

テール「君の名前はなんていうんだい？」

フェアリー族の小さな少年「先に名前を言えよ！！」

テールは、ちよつとむかついたが名前を名乗った。

フェアリー族の小さな少年はマールと名乗った。

マール「さっき泉の中に、何か落ちてきたんだけど、あれ君の？」

テール「そうだけど？」

マール外伝【泉の妖精（マール目線）】を見た後

マールはおにぎりについてきてきたので食べ物だと教えた。

マール「もらうよ？」

マールはそう言つと、大きなおにぎりを一気に食べた。

自分勝手なマールに怒ろうとしたが、

マール「お礼にこれやるよ！！」

と言われ、怒る機会を失った。

マールがこちらに投げたのはオカリナだった。

マール「それはフェアリー族に伝わるオカリナだぞ！！

何かあったらそのオカリナを吹いてみな！！俺がどこにでも行つてやるから」

テールはマールからフェアリーのオカリナをもらった。

アイテム「フェアリーのオカリナ」を手に入れた  
アイテム「大きなおにぎり」をマールにあげた。

テールとジェームズは泉を後にして日課になっている場所へと向かった。

## 選択肢A【日課になっている場所へ到達くオークとの戦闘】

テールとジェームズは、日課になっている場所へ到達した。

その場所から見る景色は普段と同じはずだった。

しかし、今日は違った。

泉で妖精に会うなど、普段と違う出来事が今日あった。

さらに、普段はありもしない殺気が漂っていた。

その殺気は背後から漂っていた。

テールとジェームズは後ろを振り返った。

その時……

テールとジェームズが見たものは一体……

テールとジェームズは、殺気のする方向へ振り向いた。

そこには、普段はおとなしい魔物がいた。

だが、今日に限っては違っていた。

怒りに満ち溢れている。

テールとジェームズは、オークに攻撃を仕掛けられた。

## 【選択肢A a】

ジェームズと一緒に戦う

俺は、ジェームズと一緒に戦うことにした。  
ジェームズは、すでにオークと対峙していた。

ジェームズは、左からオークに立ち向かっていき、オークに一撃を与えた。

すかさずにテールが、攻撃をした。

オークはその攻撃をみて、恐れをなして逃げていった。

経験値2を手に入れた。

テールとジェームズは、オークとの戦闘後、  
この場所から見える風景を楽しんでいた。

・・・が、しかし・・・

テールは、街から煙が立ち上がっているのに  
気づいた。

テールとジェームズは、急ぎ街に戻ることにした。

#### 【選択肢A b】

フェアリーのオカリナを使う

俺は、マールにもらった  
フェアリーのオカリナを使った。

テールはフェアリーのオカリナを使った。  
するとマールが現れた。

マールが戦闘に参加し、3人でオークに攻撃をしかけようとした。しかし、オークは3人を相手にできないと判断したのか、逃げ出した。

経験値2を手に入れた。

マールが仲間に入ります。

テール達は、オークが逃げ出した後、周りの風景を楽しんでいた。するとマールが街の異変に気づいた。

テール達は、急ぎ街へ戻る事をした。

選択肢A a【急げ！！街へ帰還せよ！！】魔物との対峙】

テールとジェームズは、街への道を急いでいた。

ジェームズとテールでは、ジェームズの方が足が速かった。

みるみるうちにジェームズとの間があいていた。

ジェームズは、テールを心配していたが、

テールは、かまわず先に街に戻ってくれとジェームズに伝えた。

すると、ジェームズは、急いで街への道を進んでいった。

・・・数分後・・・

テールは、ようやく街についた。

だが、先に街に着いているはずの、ジェームズの姿がなかった。

その時、ある方向から、ラッキーの鳴き声が聞こえてきた。

テールは、ラッキーの鳴き声のする方向へと走り出した。

テールは、ラッキーの影が見えてきた。

テールは、ラッキーの鳴き声のする方向に来た。

そこにはジェームズと対峙している、見知らぬ魔物がいた。

テールが近寄ろうとした時、

見知らぬ魔物が、ジェームズに攻撃をした。

ジェームズは魔物の攻撃を受けて、吹き飛ばされた。

テールは、マールにもらった

フェアリーのオカリナを取り出し、吹いた。

オカリナの音色があたりに響いていた。

するとマールが助けに来た。

## 選択肢 A a【マール奮戦く謎の手紙】

マールは、来てすぐ魔法を唱えた。

魔法は魔物に一撃を与えた。

マールに続いて、テールとジェームズが  
すかさず攻撃をした。

テールとジェームズの連携プレーは、息があっていた。

マールとテール達の連携プレーにより  
魔物は倒されたかに見えた。

しかし、魔物はまだ生きていた。

魔物は傷を負いながらも、最後の攻撃を仕掛けてきた。  
テールはすかさず、一撃を与えた。

ようやく魔物は倒された。

経験値15を手に入れた。（累積経験値17）

マール外伝【マール奮戦く謎の手紙】を見れるようになった。

マールの奮戦により、見知らぬ魔物を倒した後、  
テール達は、自宅へと戻った。

家に着くと、ポストに手紙が入っているのが見えた。

テールは、ポストに入っていた手紙を取って読んだ。

その手紙には、こう書かれていた。

アースで待つ・・・

宛先はテール宛ではあったが、送り先は書かれていなかった。

テールは、この手紙に不信感をもったが、

テールは、この手紙を送ってきた人物に興味を示した。

テール達は、アースという場所に行くことに決めた。

行動目標【アースに行く】追加

テール達は、アースに行く為に旅支度を整える事にした

## 選択肢A a【旅の支度／武器屋の中】

テール達は、アースという場所へ行く前に武器屋で装備を整えることにした。いくらかお金は持っている。

テール達は、武器屋の方向へと歩き出した。

しばらくして、武器屋の前に着いた。

テール達は、武器屋の扉を開けて中に入ってしまった。

扉を開けると、中には色々な武器が置いてあった。だが、客は2・3人しかいなかった。

テール達は、武器屋の中を歩きまわった。

・・・30分後・・・

テールは何を買おうか考えていると、手は目の前にあった古びた剣を取っていた。

その古びた剣は、いかにもかなり昔に使われていたであろうことは、わかったが、不思議なオーラが漂っていた。

テールは古びた剣を、武器屋の人に渡した。

まるで何かに操られているかのように・・・

ジェームズとマールも、それぞれ違う武器を選んでいた。

だが、ジェームズとマールが選んだ武器には不思議なオーラが、まったく感じられなかった。

テールは、買った古びた剣の不思議なオーラの事が気になった。

テール達は、武器屋の扉を開け外へ出た。

選択肢 A a 【ひとまず家に．．．アースの場所？～長老の家】

武器屋から出ると、空は暗闇に支配されようとしていた。  
夜に旅に出るのは、あまりにも危険だ。

ひとまず旅に出るのは、明日にして、家に帰ることにした。

家に帰る途中、テール達は、明日旅にでる期待と不安をいだいていた。

テール達は、家に帰り、眠りについた。

．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．

夜が明け、朝になった。

ここで、問題がひとつ起こる。

テール達は、【アース】という場所が、  
どこにあるのか知らないことに、朝になって気がついた。

テールは、その時、閃く。

それで、長いこと生きている長老なら、何か知っているのではないかと

テール達は、長老の家に向かった。

テール達は、自分の家を出て少し南にある長老の家に向かった。

長老の家は築150年は経とうかと思える家だった。  
中に入ると、長老が迎えてくれた。

長老に謎の手紙の事を話し、アースという場所を聞いた。

長老はアースという場所について語り始めた。

長老はアースという場所について教えてくれた。

## 選択肢Ab【急げ！！街への帰還／炎の上がる街】

半分ぐらい来た時、マールが驚いた顔をした。

テールは、マールの顔を覗き込むと、すごい驚いた顔をしていた。  
マールは、テール達を先に街へと帰らせると  
言い放ち、フェアリーのオカリナを吹いた。

すると、テール達は、空を飛び街へと先に帰還した。

テール達は、目の前の光景に驚いた。

そこには、炎が出ている街の姿があった。

テールとジェームズは、マールが使った

フェアリーのオカリナにより、空を飛んで街へと帰還し、炎の上  
がる街を

見て、驚いていたが、

さらに、恐怖の表情をして、逃げ惑う街の人達の姿も目に入った。

テールとジェームズは、逃げ惑う街の人に

話を聞こうと思ったが、街の人はそれどころではなかった。

街の人々は、混乱状態に陥っていた。

テール達は、家族の事が心配になった。

そんな時、向こうの方からラッキーの鳴き声が聞こえた。

テール達は、ラッキーの鳴き声がする方向に走り出した。

ラッキーの姿が遠くに見える。

>ラッキー外伝・ジェームズ外伝・マール外伝も見れるようになります  
ました<

## 選択肢Ab【見知らぬ魔物とラッキーの一時覚醒】

テールとジェームズは、ラッキーの鳴き声のする方向にたどり着いた。

するとそこには、見知らぬ魔物と母親とラッキーがいた。見知らぬ魔物は、こちらの方を見た。

テールとジェームズは、すぐさま戦闘の態勢に入った。すると見知らぬ魔物は、こちらに攻撃してきた。

テールは、魔物の攻撃を何とか避け、すぐさま反撃の態勢に入ったが、ジェームズは、魔物の攻撃を受けて倒れていた。

テールが一人で攻撃をしようとした。

その時、マールが遅れて駆けつけて来た。

マールが遅れてやってきた。

倒れているジェームズを気にしつつも、テールは、マールと二人で見知らぬ魔物と戦おうとした。

そんな時、見知らぬ魔物が、先に攻撃をしてきた。

魔物の攻撃にテールとマールは吹き飛ばされた。

テールは、半ばあきらめかけていた。

その時、ラッキーの体が激しく光始めた。

テールとマールは、その姿を見つめるしかなかった。

光輝くラッキーは、見知らぬ魔物に攻撃を仕掛けた。

すると見知らぬ魔物は一撃で倒れた。

それと同時にラッキーから光が消えた。

見知らぬ魔物を倒した。

経験値15を手に入れた。（累計経験値17）

スイッチ【ラッキーの一時覚醒】ON

ラッキー・マール・ジエームズ外伝が見られるようになりました。

**選択肢B【日課になっている場所への途中へ到達し迫り来る気配】**

ジェームズと別れてから、かなりの時間がたった。

ジェームズと別れる時のあの顔は、いつもの表情ではなかった。

日課になっている場所まであと半分になった時、小さな泉が見えた。

しかし、テールは、疲れていなかった為、先を急いだ。

テールは、まだその時、その小さな泉が、人生を大きな方向に変えるものだという事に気づいていなかった。

テールは、日課になっている場所に到達した。

ここで、テールは腹がすいたので大きなおにぎりを食べることにした。

アイテム【大きなおにぎり】を食べた。

・・・10分後・・・

テールは満腹になったのか、少し眠りについた。

・・・さらに10分後・・・

テールは、ふとこちらに向かってくる気配に気がついた。その気配は、ただならぬ気配であった。

テールに向かってくるものは、いったい何か？

テールは、ふと殺気のする方向に目を向けた。

そこにはジェームズの姿があった。

ジェームズの顔は怒りに満ちていた。

テールは、ジェームズに話かけようとした。

しかし・・・ジェームズは、話すことは何もないという感じで、  
テールに木刀を振りかざしてきた。

テールは、一体どうなってしまうのか？

## 選択肢B【ジェームズとの戦闘】

テールは、咄嗟にさけた。

・・・しかし、ジェームズは木刀を持って、こちらに向かってくる。

選択肢（テールの行動（コマンド入力））

（コマンド入力は10秒で）

戦う（↑↑↑A）

説得する（WGO↓）

逃げる（NIGERU）

10秒でコマンド入力できた人もできなかった人も次へ

（戦うを選択した場合）

テールはジェームズと戦うことにした。

テールは、心のなかでは、まだ戦うことに躊躇していた。

ジェームズは迷うことなく、テールに攻撃してきた。

ジェームズは何かに取り付かれたように向かってきた。

テールは、すかさず反撃に出た。

ジェームズの頭に木刀が振り下ろされた。

ジェームズは気絶した。

テールは、ジェームズが気づくのを待っていた。  
そんな時、街の方から煙が上がっていた。

テールは、街に何かあったのではないかと思い、  
ジェームズを抱え、街に帰宅することにした。

（説得するを選択した場合）

テールは、ジェームズを説得することにした。  
しかし、ジェームズは何かに取り付かれたようにこちらに向かって  
くる。

テールは、説得できないのか？と悩んだ。

（逃げるを選択した場合）

テールは逃げることを選択した。  
ジェームズの攻撃をかわし、来た道に向かって走った。

## 選択肢B「ジェームズを説得」むなしく急げ帰宅！」

テールは、説得する方法を考えながら、ジェームズと対峙していた。

しかし、ジェームズは、こちらに向かって襲ってくる。

ジェームズが向かってくるのを、何度もかわしながら、説得する方法を考えていた。

ふと、前をみると、目にある風景が入ってきた。

街の方から煙が上がるのにテールは気づいた。

街の方で何が起こっているのか、不安になった。

ジェームズを説得している場合じゃなかった。

テールは、ジェームズを説得することをあきらめ、家へと帰宅することにした。

帰宅するために、街のほうへと走り出した。

ジェームズは、ついてきながら走っている。

いち早く帰宅するためテールは、急激にスピードをあげた。

ジェームズは、急激にスピードを上げたため、ついてこれなくなった。

ジェームズを引き離れたテールの前に街の風景が見えてきた。

テールは、街へ到達した。

しかし・・・

テールの目にはいった街の光景は、あまりにも無残な風景だった。

> ジェームズ外伝が見れるようになります <

**選択肢B「ジェームズと戦う」背負いながら逃げ帰宅！」**

テールはジェームズと戦うことを選択した。

ジェームズは迷うことなく、テールに攻撃してきた。

テールは、ジェームズの攻撃を難なくかわした。

テールは、すかさず反撃に出た。

テールは、落ちていた木の枝を拾った。

ジェームズの頭に木の枝が振り下ろされた。

ジェームズは、恐怖で気絶した

・・・数分後

テールは、ジェームズが気づくのを待ち続けていた。  
そんな時、街の方から煙が上がっているのが見えた。

テールは、街に何かあったのではないかと思い、

気絶しているジェームズを抱え、街に帰宅することにした。

気絶しているジェームズを背負って、今まで来た道を戻っている。

ふと周りの景色をみると小さな泉がみえたが、今はそんなところじゃない。

だが、気絶しているジェームズを背負って戻るには  
来た時の倍の時間がかかっている。

テールは、ジェームズを背負いながらも、街へと帰還しようと  
街の近くまで戻ってきたとき、街の方から赤い炎が見え、  
断末魔も聞こえた。

## 選択肢C【泉の妖精1―泉での待機】

テールは、ジェームズとラッキーを連れて行くことにした。  
テール達は、日課になっている場所へと再び歩き出した。

しばらくすると山道にたどり着いた。

テールは、険しい山道をジェームズと一緒に会話しながら  
ゆっくりと歩いていく。ラッキーは後ろを同じようについてくる。

しばらくすると、小さな泉が見えた。

ジェームズ外伝【日課になっている場所へ―小さな人間?】を見た後  
ジェームズは泉の方を見ていた。

テール達はその小さな泉で休憩することにした。

テール達は小さな泉のそばで休憩をしていた。

その時、テールは、母親からもらった大きなおにぎりを  
食べはじめようとした。

ラッキーは、少し離れた所で、くつろいでいた。

しかし、テールは、うっかり大きなおにぎりを落としてしまった。  
大きなおにぎりは、泉の方にコロコロと転がり泉へと落ちていった。

テールは、大きなおにぎりを食べ損ねたため、  
不機嫌になっていた。

ラッキーは、泉を眺めていた。

そんな時、ジェームズが叫んだ。  
ジェームズ「泉が光り始めたよ！！」

そんなジェームズの言葉に、テールは驚き泉の方を見た。  
ラッキーも驚いていた。

確かに泉が光っている。テールは、その光景に驚いたが、さらに驚くことが起こった。

それは泉の中から小さな人間が現れた。  
ラッキーはさらに驚いた。

マール外伝「泉の妖精（マール目線）」を見た後

テール達は驚きを隠せなかった。

小さな人間も驚いたのか。泉の中へと戻っていった。  
するとラッキーも泉の中へと潜った。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

テールとジェームズは、ラッキーが戻ってくるまで、  
泉で待つことにした。

マール外伝・ラッキー外伝が見れるようになった。

## 選択肢A b【魔物の落とした紙切れ】

テール達は、ラッキーの変化に驚きを隠せなかった。  
ラッキーの変化はいつたい何なのか？

ラッキーは、ただの犬ではなかったのか？

そんなことは、どうでもよかった。

街は、ラッキーの不思議な力によって、危機を回避していた。

テール達は、倒れている魔物の方を見ていた。  
魔物の倒れた後には、紙切れが落ちていた。

アイテム【魔物の落とした紙切れ】を手に入れた。

魔物の落とした紙切れには、文字のようなものが書かれていた。

テールは、書かれている文字を読もうとした。  
だが、まったくわからなかった。

この文字は、現在使われている文字ではなさそうだ。

・・・

すると、マールがこれを解読できそうな人を知っていると言い出した。

マールは、その人の所まで案内するという。  
ジェームズは、街のことが気になるようで、一人街に残ることにした。

テールは、マールの案内で

その人に会うために、旅をでることにした。

スイッチ【旅のはじまり】ON

マール外伝・ジェームズ外伝・ラッキー外伝が見れるようになりました。

## 選択肢B【ジェームズからの逃亡戦】

俺は、今走っている。

後ろから襲ってくるジェームズから、全速力で・・・  
しかし、ジェームズは、かなり早い。

逃げられない！？

そう思ったとき、ふと向こうに小さな泉が見えた。

俺は、小さな泉に向かって風を切りながら走り出した。  
ジェームズも、俺を追ってくる。

ジェームズの追走から逃れるため、泉の中に潜った。  
ジェームズは、泉の前で、俺が出てくるのを待っていた。

が、しかし、俺が上がってくる気配がないと思うと、  
静かに泉から去って、街へと戻った。

俺は、泉の奥に光を見つけ、光の方に向かって泳ぎだした。

・・・

やっと光のする方向に辿り着いた。

光の先には、泉の中とは、思えない風景が見えてきた。

泉の中なのに、家や人が住んでいる街があった。

テールは、その街の謎に挑むため、その街で一番大きな家へと歩き

出した。

大きな家へ歩いていると、気づいたことがある。  
この住人は、人ではない。

フェアリーという種族だった。

フェアリー達は、テールの姿に驚いていた。

大きな家の前に着いていた。

大きな家の主は長老の家だった。

テールは、家の中に入った。

## 選択肢C【ラッキーの連れてきた男〴〵日課になっている場所へ〴〵】

ラッキーは、小さな人間を連れて戻ってきた。

小さな人間の名前は、マールと言ひ、妖精だと分かった。

マールは、妖精のオカリナをテールに渡した。

アイテム【妖精のオカリナ】を手に入れた。

テールは、マールと少し会話をし、一緒に日課になっている場所へと行くことになった。

テール・マール・ジエームズ・ラッキー4人が、

日課になっている場所へと向かうことになる。

泉から少し歩きだした。

4人で楽しくしゃべりながら、時間をかけて・・・

・・・

やっと日課になっている場所へ辿り着いた。

テール達は、そこから見える風景の壮大さに感動していた。

だが、そんな時、感動を台無しにすることが起こった。

辺りに殺気があふれていた。

テール達は、その殺気を感じ、警戒した。

周りには、普段はおとなしいはずのオークの群れが、こちらに襲いかかろうとしていた。

テール達は、オークに向かって戦闘態勢をとった。

テール達とオークの戦闘がもうすぐ始まる。

だが一方でおとなしいはずのオークが、今日に限って凶暴化したのか？

不思議に思っていた。

## 選択肢 B【見るも無残な街の跡1／見知らぬ魔物の影1】

条件・・・選択肢 B【ジエームズを説得／むなしく急げ帰宅!!】を見た後

テールは、街へ戻った時、街の変化に啞然とした。

それは、昼の街の風景とは変わりすぎていた。

街は、炎の波にのまれ、空は、真っ赤に色を変えていた。

テールは、街の中を歩き始めた。

街の建物も見ると影もなく壊れていた。

しばらくすると、ラッキーを発見した。

ラッキーの姿は傷つき、死にかけに近かった。

ラッキーは何かに寂しそうに鳴いていた。

しばらくするとラッキーがある方向に歩き出した。

テールは、ラッキーと同じ方向に歩き出した。

ラッキーとテールは、

知らず知らずに家があった場所に来ていた。

家のあともなく粉々になっていた。

母親の姿はなく気配もなかった。

その時、走り去っていく影が見えた。

その姿は、人間ではない魔物っぽかった。

街の人は、走り去っていく影に氣にする余裕もなく、  
動揺して、逃げ惑っていた。

テールとラッキーは街が、なぜこんな風になったのか？  
を探るため、旅に出ることにした。

## 選択肢B【見るも無残な街の跡々 見知らぬ魔物の影2】

条件・・・選択肢B【ジェームズと戦闘く背負いながら帰宅!!】を見た後

朝見た活気のある様子はそこにはなかった。

街は炎に包まれ、怪しい人間ではない影だけが見えた。  
絶望の中である方向から鳴き声が聞こえてきた。

テールは、鳴き声のする方向へと歩き出した。

鳴き声のする方向に向かう間にジェームズは、気が付き  
あまりにも変わった街の風景に驚いていた。

テールとジェームズは、鳴き声のする方向に  
たどり着いた。

そこには、傷だらけで瀕死に近いラッキーがいた。  
あまりにも弱っていて鳴き声も小さくなっていた。

テールとジェームズは、ラッキーの手当てをした。  
ラッキーは、とりあえず危機を脱した。

ラッキーは、何かに怯えるように震えていた。

なぜ、街がこんなことになっているのか？わからない  
テールとジェームズは、この謎を解くため、

ラッキーも連れて旅にでることにした。

あまりにも変わった街を、後にして歩き始めた。  
しばらくすると街の姿は、小さくなっていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6941f/>

---

伝説回帰～5000年の時を越えて～

2010年10月12日12時47分発行